

第 11 回国際中世哲学会（於ポルト）報告

加藤 信 朗

第 11 回国際中世哲学会は「知性と想像力 (Intellect and Imagination)」を主題として 2002 年 8 月 26～31 日にポルトガルの古都ポルトで開催された。参会者は世界各国から 450～500 人ほど、日本からは 11 人（加藤雅人、清水哲郎、高橋雅人、長倉久子、水田英実、矢内義顕、八巻和彦、山崎裕子、山本芳久の諸氏と加藤信朗 [以上本会会員]、ほかにフランクフルトに滞在中の中村秀樹氏）であり、うち清水、長倉、中村、八巻の 4 氏が研究発表をなされた。

大会のプログラムは豊富かつ多彩であってここに総括することはできない。わたしに興味深く思われ、また際立っていると思われた本大会の特徴を全体会議 (Plenary Session) の講演を中心にして、これにわたしが出席して興味深かった個別研究 (Short Papers) を数点加えてご報告する。

とりわけ本大会を特徴付けていたものは 9 世紀から 12 世紀にいたるイスラーム圏での中世哲学の展開であり、それはただイスラーム教徒のものであるだけではなく、イスラーム圏の中で同時に共存していたユダヤ教徒、キリスト教徒との対話と討論のうちに展開されていったこの時期の中世哲学の展開の過程であった。また、これを本大会のテーマであった「中世哲学における知性と想像力 (Intellect and Imagination in Medieval Philosophy)」という主題に関係づける時、それはアリストテレスの『デ・アニマ』の伝承過程において、とりわけその第三巻の「知性と想像力」という問題がまずイスラーム思想圏、さらにユダヤ思想圏の中に受容されたとき、こうむった変容と展開の歴史に関わるものだった。『デ・アニマ』本文ではこの問題は未展開に終わっている部分が多いため、預言者と『聖書』の問題を中心に据えざるを得ないこれら「聖典の民」の思想・文化圏でのこの問題の展開は興味をそそられた。さらに、529 年のユスティニアヌス帝によるキリスト教圏におけるギリシャ哲学の教授の禁止

以後、西ヨーロッパ世界においてはこの形でのアリストテレス哲学の受容と展開が閉ざされ、西ヨーロッパ世界がいわば自己閉鎖的思想圏を形成していったことを考慮に入れる時、このような問題は、今日、とりわけ地球規模の諸文化、諸宗教の共存と対話が求められる現代において緊急の研究課題であると思われた（これが西ヨーロッパ世界に導入されたのは、周知のとおり、12世紀、13世紀になって、イスラーム圏を通じてであった）。

(1) Dimitri Gutas (Yale): Intellect without Limits — Rational Epistemology and “Mysticism” in Avicenna

Dimitri Gutas氏はAvicenna研究において、すでに多くの研究を発表している方である。本大会での発表は、Avicennaの学説が西ヨーロッパの学者のこれまでの解釈傾向のように、いわば、「光の神秘主義」というような「照明論的」なものと理解されるべきではないとするこれまで氏が強調してきた主張を述べるものであったが、「預言者」の「想像力」が特別なものであるが、充分にアリストテレス解釈として合理的に行われているものであることを強調する点にあった。「啓典の民」としてのイスラーム学者において聖書解釈がどのような特徴を持っているのかがわたしにとってはこれからさらに知りたいと思われるところだった。

(2) Zev Harvey: Four Theories of the Imagination in Medieval Jewish Philosophy

4人の代表的な中世ユダヤ哲学者を取り上げる。(i) Rabbi Judah Ha-Levi (c. 1075-1141), (ii) Rabbi Abraham ibn Daud (c. 1010-1180), (iii) Rabbi Moses ben Maimon or Maimonides (1135/8-1204), (iv) Rabbi Levi ben Gershom or Gersonides (1288-1344)について、その想像力 (Imagination) に関する説を概観している。聖書解釈に触れるものがあり、ユダヤ教師父の中での見解の多様性を示して興味深かった。ただし、前の二人がAvicennaの想像力に関する説の影響を大きく受けているのに対してあとの二人はAverroesの同時代者およびAverroesの間にはいる中世ユダヤ哲学の多様な一局面を抉り出して興味深かった。

——このお二人の話は共通する問題を多く含んでいるので、わたしに関心のあるパースペクティブから、その問題点を大づかみにまとめて報告する。

アリストテレス研究者の端くれとしてのわたしには、*De Anima*では十分に展開されているとはいえ想像力 (imagination) の問題について、Avicennaが詳しく

展開していることがまず強く関心を引いた。

Avicenna は「内部感覚 (inner senses)」の働きを五つに分ける。(1) 共通感覚—知覚対象の形相を受容する働き。(2) 形相保持の能力 (Form-bearing faculty) (Imagery と呼ぶ)—共通感覚が外的世界から知覚した想念 (images), 形相 (forms) を保存する働きである。しかし、それは同時に、想像力 (imagination) によって構想された想念と形相を内的世界から受容して保持する働きでもある。したがって、それは「上位の世界 (supernal world)」から想像力にもたらされる想念、形相を保持する働きでもある。(3) 想像力 (Imagination)—想念、形相を揺り動かし、結合分離を行う働き、したがって、それは抽象概念を結合分離する思考力 (Cogitative) でもある。(4) 評価能力 (Estimative faculty)—事物がもつ「非感覚的な諸属性 (non-sensible attributes of things)」を知覚する働きである、それは一定の行動を引き起こす働きとなる。羊が狼を見て逃げる働きがこれである。(5) 記憶 (Memory, Recollection)—評価能力によって与えられる観念その他を保存する働き。これらはすべてまずアリストテレスに従い感覚的個別に関わるという特徴をもつ。これに対して、知性 (intellect) の働きは知性的対象、抽象的、非物体的、永遠な対象に関わる。ここでもアリストテレスにしたがっている。

ただ内部感覚は魂内の働きであるため、知性に関わる知性的対象を想像力の働きによって、なんらか感覚的な物体的想念に還元し、自己内に記憶としてとどめるという特性を有する。内部感覚をそれぞれ脳髄の異なる部位に関係づけている点、また、人間の知性が能動知性に関わることによって認識した知性的対象を、身体的な人間という条件に応じて、何らか感覚化して、いわばフィクティブに構想して保持するものであり、その範囲で、内部感覚の働きの五つは何らか相互浸透性相を持つということは、*De Anima* には展開されていないが、アリストテレス哲学の中世への受容・展開の一局面として貴重であると思った。

ついで、このことがイスラーム教学、および、ユダヤ教学において、預言者のもつ想像力 (imagination) の働きをこの連関の中でどのように位置付けるかが、Avicenna およびユダヤの四人のラビの中でどうなっていたかが、お二人の話の内容になるわけだが、この点に今詳しく立ち入ることはできない。

すこしだけ述べれば、Gutas さんのお話では、Avicenna の場合、イスラームの預言者のもつ想像力の働きは過去、現在、未来の個別の出来事に関わる知であり、特に

神秘的な内容のものではないことが強調されていた。しかし、知性の働きは当然、神秘的な知に関わるわけであり、「神的啓示 (revelation)」にかかわる時、それがどのような具体的内容をもつかはもう少し知りたかった。ただ、外的事物に関わる感覚知についても上界の知性的事物に関わる知性知についても、それぞれのうちに抽象性と具体性の両面があることが強調されており、したがって、知性知が具体性の面で見られる時、それは当然一つの直感的な「神的な事柄」の視 (vision) になると思われる。

また、Harvey さんの話では、はじめの二人は Avicenna の説を受容しており、そこで、内的感覚の一つとしての想像力のもつ、いわば重層性が、聖書読解にかかわる時、独特な働きをし、たとえば、楽園における蛇の誘惑という物語がどのような魂論的な意味をもつものとして読解されているかが、とても、興味深く、これはキリスト教思弁における聖書の霊的、象徴的読解に重なる部分を多く持つものである。これにたいして、あとの二人は Averroes の説を受容しており、内的感覚を Avicenna のように多元化せず、*De Anima* テキストにしたがって、外的個別的な事物に関する知覚像と記憶想念だけに限るものようで、上の二人とは大きく異なることになる。そして、この点で、Averroes にしたがったトマスにつながるものを多く持つわけである。ただし、最後の Gersonides は、Averroes についての注釈書を書いており、Averroes が commentator であれば、Gersonides は supercommentator であると呼ばれており、もう少し微妙なものがあるようである。つまり、Gersonides のユダヤ教の師父としての面を強く見る時、そう簡単に Averroes 流のアリストテレス主義者としては片付けられない面があるようである。

—これらの点はわたしにはまったく未知の領域であったので、教えられるところが多かった。なお、このお二人の発表については、あとで原稿を送っていただいたものについて、今回整理して報告しているが、未出版の未定稿であることはお断りしておきたい。

(3) Alain de Libera (Paris): Augustin contre Averroes. Deux modele du «sujet» au Moyen Age

Plenary 講演の中では、もっとも哲学的思弁的であったといえる。フランス語なのでわたしには十分に聞き取れていないところがあるが、趣旨は「基体 (hypo-keimenon)」と「活動 (energeia)」の二項関係として、「魂」を捉えるアリストテレス哲学の枠組みに即することによって、人間の「自己 (=主体・sujet)」もそのよう

な枠組みにのる仕方では考えざるをえなくなるのがアヴェロエス的な思考枠組みであり、その範囲でそれは人間の自己を捉えるのに不十分であり、アポリアを生む。これに対して、アウグスティヌス的な「人間の自己把握」は霊的被造物としての人間の自己(=魂)を「三一論的な枠組み」で捉えるものであり、そこには「父-子-霊」のペリコーレーシス(相互浸透)という神的三一性が原型として機能しているので、アリストテレス的な「基体-活動」という枠組みを越えるものがあるという点に主要な論点があるように思えた。

中世哲学史をジルソンのものと違ってイスラーム哲学、ユダヤ哲学を大幅に組み入れる形で書いたアラン・ド・リベラに予想されるものとしてはやや意外だったので、あとで「あなたがそれほど反アヴェロエスとは思わなかった」といったら、「時間が足りなくて、アヴェロエスのことが話せなかった」といっていた。しかし、この話は彼の本音なのだとうわたしには思えた。彼の最初の著作の一つである Emilie Zum Brunn さんと共著のエックハルトの著書を読んだ時(大森正樹氏の翻訳がある)、エックハルトの思索をギリシャ教父にまでさかのぼって理解しようとしていた彼の学識にかつて感銘を受けたことがある。このギリシャ教父の思索の中核をなす三一性のペリコーレーシスこそ彼の哲学を支えているものなのだろう。ここに、良い意味での西ヨーロッパ哲学の立場の表明があり、それは東西の対話を促しうるものである。「わたしも Augustinian なので、あなたの立場に賛成なのだ」とわたしは答えた。

[B] Short Papers

(1) Sara Klein-Braslavsky (Tel Aviv): Gersonid's Method of Inquiry in the Discussion on the Material Intellect

アリストテレスの *Topica* の dialectical method と一般的に method of division を用いて、material intellect (可能知性のことであろう) の基体が何であるかを論究する。資料は著書 *Wars of the Lord* (「主の戦い」)。

(1) 分離知性 (separate intellect) (Themistius), (2) 魂 (soul) (Averroes) (3) 身体 (body) (代表する先行者はいない) という考えられうる三つの可能性をあげ、diaporematic な論究を通じて論じる。(1) を排除し、(2) と (3) を折衷的する解決を提示する。身体は魂の想像力の働きおよび感覚的魂を媒介にして、material intellect の最終的的な基体であるとみなす余地があるからである。これは新しい解決であり、Averroes と異なり、Gersonides は質料を質料的知性の究極的基体であると考えた最

初の人である——これが Sara さんの結論である。

——「可能知性」の問題をアリストテレス主義に則し、かつ、人間の総体的現実に即して考えた点で興味深い。

(2) Stefano Perfetti (Pisa): *Movere sensum disciplinaliter — Zoomorphic Symbolism and theory of knowledge in Eriugena, Periphyseon IV 751c-752c*
『創世記』天地の創造の第6日における動物の創造、「地を這うもの (reptilia)」、
「地の獣 (bestiae terrae)」、
「家畜 (iumenta/■quadrupedia)」という三種について、
それぞれを理性的動物としての人間の情念の働きの各種に関係させる象徴的解釈を施し、これらを理性的に支配するものとして人間を理解するエリウゲナの *peri physeon* の紹介である。オリゲネスほかの教父たちの解釈に言及してエリウゲナの特徴を浮き彫りにしており興味深かった。ピサの人で、京都大学の福谷さんの友人であることもあり、好感を持った。

(3) Andreas Speer (Würzburg): 'Der Geist der Weisheit'. Meister Eckhart über Grund und Grenzen des Intellekts
非常に明快な話だった。早稲田大学の会で来日した時以来の友人であり、前回の Erfurt での大会の企画者の一人だった。2003.9.25-28. Erfurt でエックハルトの国際研究集会を開催する企画者である。

[C] Meetings of Commissions

ほかに多数に分かれた Meetings of Commissions が毎日開かれており、これは、たとえば、「イスラーム哲学」とか、「ユダヤ哲学」とか、「Trivium」とかの部会に分かれており、各自その領域に関心をもつ研究者が集まって、互いの情報交換、これからの研究プロジェクトについて語り合うものだった。

これらのなかでは、とりわけアヴェロエスのあらゆる資料を網羅した新しい批判的校訂全集の企画が際立っていた。以上、多彩かつ豊富な大会をわたしに興味深く思われた視点から、ご報告した。9世紀から12世紀にいたるイスラーム圏、ユダヤ圏での哲学・神学の展開はとりわけ注目されたものであり、わが国におけるこれからの研究の方向にも大きな意味があるものと考え（そんな関心が強かったため、日本の同僚諸氏の研究発表には一つも出られなかったことは申し訳ないと思っている）。